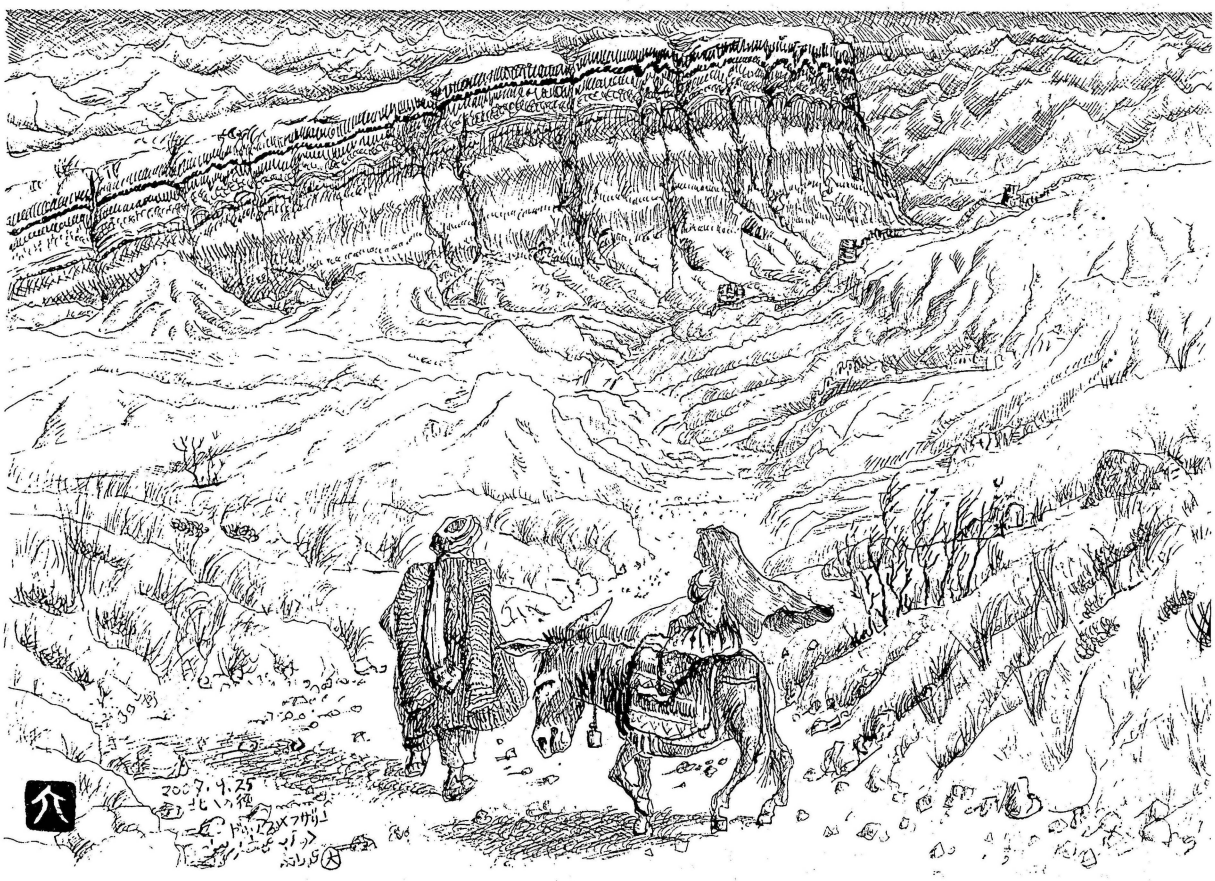
Peshawar-kai

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル603号室
TEL 092（731）2372
FAX 092（731）2373

No.93
2007年10月3日

〈URL〉 http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/　〈E-mail〉 peshawar@kkh.biglobe.ne.jp



表紙絵　北への径 ドゥ・アウ・メフザリン（画・甲斐大策）

診療の拠点をアフガニスタンに	中村　哲
植樹品種の研究にも成果が出ています	山口敦史
算数大嫌いな私が会計担当に	神代大輔
アフガン人スタッフとの交渉で仕事の醍醐味知る	佐々木啓泰
「日陰の木」の下で	梅本霊邦
日常の中の宗教	村井光義
アフガン人の幸福の基盤はお金でなく農村社会に	芹沢誠治
いつしか一種の家族的気配が漂い	石橋周一
診療所に来られない人々のためにも何か	西野恭平
沖縄のハンセン病療養所で研修	河本定子
少女ハキマはアフガニスタンへ戻っていった	藤田千代子
ワーカーＯＢ報告⑤現在大工修業三年めです	鈴木　学

ペシャワール会は、1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

診療の拠点をアフガニスタンに
――PMS基地病院は十一月までに全面移転

PMS（ペシャワール会医療サービス）総院長　中村哲

中央政府による突然の改善命令

みなさん、お元気でしょうか。

アフガニスタン、パキスタン共に大きな動きが予想以上に急速に進んでいます。

先の年度報告で医療活動の危機を訴えましたが、その後の経過をお伝えします。

既に年度報告で触れたように、PMSは一九八六年、難民救援団体としてパキスタン政府に登録され、当事無視されていたアフガン人のハンセン病患者の診療から出発、その後アフガニスタン山村部の無医地区診療モデルを作ることを目指して活動を続けてきました。

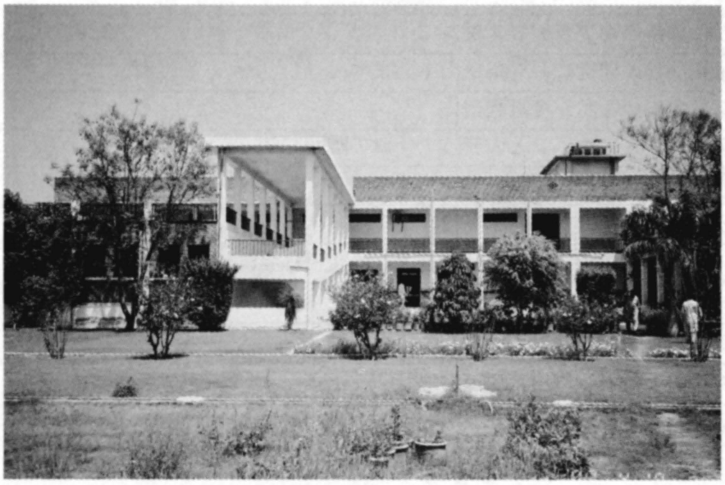
一九九八年四月、このために恒久的な基地病院をペシャワールに建設、パキスタン政府に認められた難民支援の国際団体であると同時に、北西辺境州政府に認可された団体（社会福祉法人）として二重の地位を得ました。これは、半永久的なハンセン病専門施設を置き、長い年月を要する同病の患者のケアを目指したものでありました。

また、「いずれ難民機関のステータスは消滅するので、地域の医療機関として根を下ろしたがよい」とのパキスタン政府高官の勧めに従ったものでありました。私たちは、「これで現地に土着化して活動できる」と信じ、完璧に合法性を遵守してきた積りでいました。

しかし、今年五月になってアフガン難民強制帰還の動きが始まると、突然「診療内容の改善命令」が中央政府から出されました。「正規の看護師がいない。州政府への二重登録は違法である。州政府認可なら外国からの運営費を使えず、管理者はパキスタン人でなければならない」というものでした。

調べてみると、確かに法的には改善命令は正しいものでした。ただ、解せないのは、それなら何故九年前にそれを知らせなかったかということです。また、ハンセン病に対する医療関係者の偏見が強く、パキスタン人の医療者は就職したがりません。それに、ハンセン病の合併症は、整形外科、形成外科、眼科、皮膚科、神経科と、総合的なケアを要するので、特別な訓練が必要です。やむなく、自前で診療要員を育て上げ、現在に至っています。

そこで、合法性を得るために、資格のあるパキスタン国籍の看護師、医師などを雇用し、「基準」を満たす努力を続けました。だが今



１０年間に亘り患者たちの憩いの場となったＰＭＳ本院の中庭

度は、日本人ワーカーのビザ取得が困難になりました。ひどい場合は、二週間しか滞在が許されず、出入国を繰り返していると診療ができないのです。それでも患者のために不便を凌いできましたが、ひとつ「改善」を達成すると、また次の「改善点」が要求されます。こうして役所との対応に忙殺され、とても診療ができる状態ではなくなりつつありました。

ついに万策尽き、疲れ果てた当方は、「改善命令が事実上の閉鎖要求であり、難民強制帰還に伴う国家方針」であることを悟り、拠点をアフガニスタンに移して実質的な診療に力を注ぐべきだとの結論に至りました。だがアフガン側でも、実現不可能な紙上の「改善要求」が多く、一時は最後の拠点であったダラエヌール診療所の閉鎖も考えたほどです。

しかし、心ある人は行政の中にもいます。ニングラハル州保健省、カーブルの中央政府保健省大臣は私たちの過去の活動を知っており、熱烈なPMS支持者でした。アフガン撤収・ダラエヌール診療所閉鎖に猛反対しました。結局、彼らの好意によって合法性を獲得、ジャララバードに医療活動の拠点を移し、診療所継続が保証される見通しが立ったのでした。もともとハンセン病患者の大半はアフガニスタンの東部在住者／出身者が圧倒的に多いこと、パキスタン国籍者でも実質的に国境を自在に越えることを考えると、これ以外の選択は考えられなかったのです。こうして、私たちPMS（ペシャワール会医療サービス）は、その名称にもかかわらず、拠点ペシャワールを空けてジャララバードに移ることになりました。

政変の兆しと凶作

それでも、アフガニスタンの現状は、前途多難です。

九月二十日現在、アフガニスタン南部・東部・北部の各州で、戦闘は激しくなっています。欧米軍は増派されて五万人以上の大兵力となり、他方「タリバーン勢力」の面の実効支配は、徐々に、かつ確実に首都カーブルを包囲しつつあるように思われます。日本外務省は、既に七月段階で「渡航延期」を勧告し、さらに「真にやむを得ない事情で首都カブール、ジャララバード、ヘラート、マザリ・シャリフ及びバーミアンの五都市に残留せざるを得ない場合を除き、直ちに退避するよう強く勧告します（九月十六日）」と、危険を訴えました。

毎日数百名の単位でアフガン人たちが命を落としています。公式の発表では「NATO軍、〇〇名のタリバーン兵殺害」と報道されますが、大半の犠牲者は普通の農民や市民たちです。国際赤十字委員会は、「犠牲者の半分以上が無関係の人々だ」とし、活動を「緊急態勢」に切り替えました。米国に擁立されたはずのカルザイ大統領自ら、「アフガン人の命が軽視されている」と訴え、外国軍に自重を促し、タリバーン勢力と水面下で話し合いが進められていると伝えられます。

この急速な戦闘激化とアフガン人一般市民を巻き込む犠牲増加の背景は、

1．危険な地上戦をANA（アフガン国軍）に主に請け負わせ、欧米軍による攻撃が主として空から安易に行われるため、周囲を巻き込みやすい。

2．タリバーン勢力と一般パシュトゥン農民と区別がつかず、単に支持者である非戦闘員も「タリバーン兵」と誤認される。

3．理由もなく殺害された者の肉親が、政治とは無関係に「報復」に外国軍を攻撃したり、タリバーン勢力を幇助したりで、悪循環を作っている。

4．タリバーン勢力の主力がパシュトゥン農民そのもので、土着性が強い。必ずしも「イスラム過激派」とは限らない。「国際テロ組織」とは無関係に、「外国人に荒らされた郷土の防衛」という動機が強い。

5．首都の華美な風俗と貧困層の状態との余りの格差、外国兵の横暴、強盗、殺人事件

灌漑用水路は第二期７キロの延長工事が着々と進む

が増える中で、旧タリバーン政権による治安の良さを懐かしむ声が強くなっている。などがあげられますが、報道されない最も重要な事態は、今年の大凶作です。アフガン東部では七月から雨が一滴も降らず、異常気温上昇で春先に洪水が頻発、残雪が消えています。このため、中小河川流域の耕地は全滅に近く、カーブル河、クナール河のような大河川でも、八月段階で平年の十一月から十二月なみの水量です。水源であるヒンズークッシュ山脈で、もう解けて下る雪がないのです。このため、作業場周辺の広大な農地も、危機に瀕しました。河の水位が下がったため、コメやトウモロコシの全滅がささやかれました。まだ残暑がある時期にこれほど河の水が減ったのは、過去なかったそうです。用水路建設班がジャララバードに隣接するベスード村（約二千～三千町歩）の二つの取水口を復旧しましたが、シェイワ郡一帯（約二千町歩）は復旧が不可能、ＰＭＳのマルワリード用水路に一〇〇％頼る状態となりました。おかげでニングラハル州北部は安定しましたが、これはアフガニスタンで例外的な幸運例だといわざるを得ません。

国際協力や国際貢献がこれだけ議論されているのに、小さな用水路さえ修復する助けもないのです。人々は追い詰められた心情に陥っています。

現在、マルワリード用水路については、来年四月に全長二〇キロを完成して一挙に数千町歩を潤し、十万人の人々が暮らせるよう必死の突貫作業が継続されています。

治安悪化へ対応

他方隣国パキスタンでは、内戦前夜を思わせる状態が続いています。行政の混乱だけでなく、既述のアフガン難民強制送還による影響もあり、ペシャワールでは暗殺、爆破事件が頻発するようになりました。八月下旬、パキスタン・アフガニスタン両国の政情の緊迫化に伴い、わがＰＭＳも「非常事態」と認識、以下の当面の方針が打ち出されました。

1．懸案のＰＭＳ病院基地病院は、ジャララバードに十一月までに全面移転する。約十年間機能した基地病院は捨てがたいが、ア

ダラエヌールの用水路と子供たち

フガン側で再興を図る。まずダラエヌール診療所を充実、ハンセン病等の診療設備を長期的視野で建設。

2．マルワリード用水路は、突貫工事態勢を敷く。二年分の予算を投じても、第二期七キロを来春にまで完成、数千町歩灌漑（かんがい）を実現すべく全力を尽くす。パキスタンから強制帰還させられる難民の大半がニングラハル州にとどまり、州やカーブル政府にとっても大きな圧力になっている。その負担を軽減すれば、少なくとも同州北部の混乱を避けうる。

3．安全対策には万全を期すが、都市部は我々にとって危険になりつつある。日本政府の動き次第では、我々の安全に甚大な影響を及ぼす。欧米軍への協力姿勢が打ち出されれば、独自の現地情報と判断に基づき、日本人ワーカーを段階的にアフガニスタンから退去させる。危機管理の自衛対策をとる。

4．「海外からの安全情報」は、しばしば現実と異なるので軽挙妄動しない。指示があるまで粛々と任務を継続し、日本人ワーカーが退去しても基本的な事業に中断なきよう、作業工程、事業規模等を考慮する。地元農民や地元医師の手でも続けられる態勢をとる。一朝事あれば、思い切った方策をとる。

「国際社会」からの名誉ある孤立を

政情と「国際世論」を見る限り、「むなしい」の一語です。もう放っておいて欲しい、そう思います。六年前の「アフガン報復爆撃」と「アフガン復興ブーム」のとき、誰が現在の状態を予想したでしょうか。欧米諸国の軍事介入、「対テロ戦争」の結末は既に結論が出たと言えるでしょう。武力介入は、良き何物も、もたらしませんでした。アフガン民衆の現状を抜きに進む先進諸国の論議に、忍耐も限界に近づきつつあります。

よく「日本だけが何もしないで良いのか。国際的な孤児になる」ということを耳にします。だが、今熟考すべきは、「先ず、何をしたらいけないか」です。

「徳は孤ならず、必ず隣あり」と言います。目先の利を離れ、和を唱えて孤立するなら、それは「名誉ある孤立」であり、世界の人々の良心に力強く訴え、真に国民を守る力、平和への国際貢献となるでありましょう。その時、私たちはアジア民衆の友であり、平和日本の国民であることに、胸を張ることができるでしょう。

民衆の半分が飢えている状態を放置して、「国際協調」も「対テロ戦争」も、うつろに響きます。よく語られる「国際社会」には、少なくともアフガン民衆が含まれていないことを知りました。しかし、このような中でこそ、私たちは最後の一瞬まで事業完遂を目指し、平和が戦争に勝る力であることを実証したいと思います。皆様のご理解とご協力を切にお願い申し上げます。

中村哲（なかむらてつ）
九州大学医学部卒。専門＝神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境州の州都ペシャワールに赴任。以来二十三年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧民層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も行っている。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千四百ヶ所以上）事業を実践。さらに〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、〇三年三月からは灌漑水利計画に着手、〇七年三月第一期工事完成。年間診療数約八万人（二〇〇六年度）。

＊ワーカー通信

植樹品種の研究にも成果が出ています

灌漑用水路建設・植樹担当　山口敦史

鋭い陽光のなか秋の風

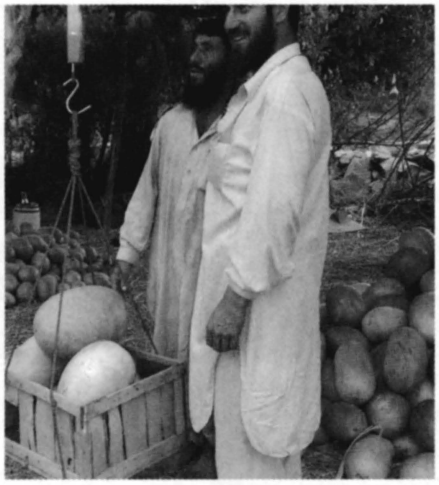
この春よりこちらに赴任し約半年。何枚とカレンダーを捲ろうとも、身が悶えそうになるこの濛々とした夏の暑さに変化はありません。九月のある朝、日々かわりなく鋭い陽光を迎える。どういうわけでしょうか、鼻から水が垂れてくる。外気に晒されている自分の体はいつの間にか冷気に包まれている。そう、そよふく秋の風がもうそこまで迫ってきているようです。この体の小さな異変が、秋を感じるという大きな喜びと驚きに変わっていく今日この頃のアフガニスタン。

新月を迎えた九月十三日の早朝、特別な一日がまた始まろうとしています。この一ヶ月間、日中飲み食いしてはいけない断食が始まったのです。日の出前、ニンニクのきいた香ばしい匂いまで楽しめたりする分、普段より数倍豪華な朝食を頂く。食しながら子どもの頃、バイキング好きだった自分の母とよく朝食バイキングに出かけたことを思い出しました。この幼い頃の体験から、ある程度食せば一日中何も食べなくても生きれるという自信が湧いてくるのですが、水を絶つというのは想像も付き難いものがありそうです。しかしこの行いは、アフガンの大地に生きるものにとって何ら不思議のない行いなのかもしれません。実は私が赴任してこの半年もの間、まとまった雨が降った記憶がない。悠然と植物や木々も断食をしているといえないでしょうか。

大地を破り双葉が

ある夏の盛り、植樹部門を担当している自分は、この極限ともいえる自然環境に息長く根付いている樹種を探索する機会を幸運にも持つことができた。それは、この環境に適応した乾燥に強い樹種を抽出し、カナル（用水路）の護岸やその周辺の緑化にこれらの樹種を役立たせてみてはどうかという思惑からです。水が豊かにあるカナル周辺から岩があちこちに剥き出しになっているガンベリ沙漠に向かうと、素人の眼にもその歴然とした植生の違いを判別することができる。果樹やアカシア類など数十種類ある樹木は、一歩沙漠に足を踏み入れてみるとわずか数種に激減。しかしこの極限の状態でもなお、煌々とみどりは萌え、根は乾いた大地を鷲掴みにしている。堂々たる威風は、日中水を飲まないだけでブツブツと言う輩からすれば畏怖の念を抱かずにいられません。

そしていよいよ、来期の植樹のための苗作りが始まりました。中でも野生種であろう〝ビエラ〟と呼ばれる樹種は、住民にその育種方法を尋ねても「分からない」といいます。先輩ワーカーが中心となり住民と協力し、播種前の処理や培土、灌水の条件を変えるなどして研究を重ねていく。ある朝、現地人のララ氏が観察していると、「オーミスター」と叫ぶのです。もしやと逸る気持ちを落ち着かせながら駆けつけると、何と双葉が大地を破り持ち上げ、その可憐な容姿を見せてくれている。その光景は辺りに感動を生み、汗臭い鬚の濃い男たちを抱き合い喜ばせました。彼は続けて「ミスター祝おう、メロンを買ってきてくれ！」。大きな喜びは、小さなメロンへと変わっていくのでした。



丸々と実ったアフガニスタンの特産品、ハルブザァ（メロン）

算数大嫌いな私が会計担当に

ジャララバード事務所会計担当　神代大輔

紙幣で指は真っ黒

ジャララバードに二月に着任し、六月からは退任された西さんの後任として、会計の仕事を担当しています。

ペシャワール会といえば、土木には素人の日本人ワーカーが現地の人と共に水路を造っているということは、会員の皆様はご存知かと思います。では、裏方の会計はと言いますと、これも素人であります。まさか、会計という重要なポジションに、算数・数学の大嫌いな私が配置されることになろうとは思ってもみないことでした。

ジャララバードオフィス責任者の芹沢さんや、先々代の会計担当の松永さん、長らく会計業務を担当しているアフガン人スタッフのハニフラから、指導と助言を頂きながら、慣れない仕事に四苦八苦しております。

ジャララバード会計で最も重要な仕事は、現地人スタッフ、レイバーに給料を配ることです。銀行口座など誰も持っていません。当然、給料は手渡しです。

この仕事の最初で最大の難題が、給料用のアフガニー紙幣の調達です。両替業者にルピーからアフガニーへの両替を依頼する訳ですが、日本の銀行のようにATMがある訳ではありません。両替したアフガニー紙幣は全て枚数と破損状況をチェックします。その数は一万枚に近い……。しかも、紙幣は汚くボロボロです。チェック終えれば、指は真っ黒になってしまいます。

歴代の会計担当者が幾度か、会報で触れている通り、この国の紙幣の惨さには驚かされます。真ん中で真っ二つに割れた紙幣を、ホッチキスの針で留めてあったり、糸で縫い合わせてあるモノを見た日には呆れ果ててしまいます。

真剣勝負の給料配り

こうしたカルチャーショックを受けながら、各人の給料袋にお金を詰めて、給料を渡すことになります。カナル（用水路）で働く半月払いのレイバー（作業員）・チョキダール（門衛）の場合、朝からカナルへ出かけ、現場を巡り廻って、給料を渡していきます。

実は、この給料配りの仕事が一番好きだったりします。日ごろ、オフィスに引きこもっている会計担当が、唯一、現場に出る仕事だからです。

一人、一人に声をかけながら、給料を渡していく訳ですが、袋の中身を見て、嬉しそうな顔、思ったより少額でがっかりした顔、みんなの顔はあまりに正直過ぎます。

会計を引き受けた当初は、A地区からK地区までが配布範囲でしたが、配布に行く度にその範囲は広がり、今ではM地区までに達しています。月に二回、配りに行く度に、現場の進行速度に驚かされるものです。

アフガニスタンの人は、お金と土地と女の問題になると人が変わると言われています。実際、会

現地スタッフとともに会計事務に奮闘する神代ワーカー（中央）

計としてお金の問題に関わることになりましたが、みんな真剣です。給料日が近づけば、「今度はいつ給料日なんだ」「ちゃんと給料でるのか」と何人かのスタッフから問い合わせがやって来ます。渡された給料袋に貼り付けてある給与明細に疑問があれば、すぐに質問してきます。

こうして、お金と一緒に仕事をしていると、働いて、そして、お給金を頂くということが、いかに大変なことか改めて考えさせられる次第です。

給料は銀行振込、買い物はカードで、電子マネーで、なんてことをやっていると、お金を見ないで生活できてしまう日が来るでしょう。それは、便利なことかもしれませんが、何かが欠落することになるかも知れません。いつの日か、アフガニスタンの復興が成ったとしても、給料袋を配る習慣は残しておいてもらいたいと勝手に考える次第です。

アフガン人スタッフとの交渉で仕事の醍醐味知る

灌漑用水路建設担当　佐々木啓泰

弱冠二十歳でヒゲ薄い

ＰＭＳ水路事業のアコモデーションという所に配属になりました。アコモデーションとは、一言で言うと「水路作業の現場オフィス」です。別にジャララバードにメインオフィスがあり、アコモデーションが物品の注文を担当、ジャララバードのメインオフィスが物品の購入を担当、という具合に様々な仕事を分担しています。

私の仕事は色々あるのですが、その中でも面白いのが、アフガン人スタッフから物品の注文を受けることです。この仕事の醍醐味はなんと言ってもアフガン人スタッフとの注文量の交渉です。まず必ずと言っていいほど必要量より多くの注文が来ます。「とにかく予備は多いほうがいい」という考えの下で注文が来るので、こちらは必要量を見抜いて、必要量だけ買うように交渉しなければならないわけです。

向こうはなんとか買って貰おうと懇願してきますが、こちらも貴重な募金を無駄遣いしたくはないし、それになんと言っても「日本人に言えばなんでも買ってもらえる」というような依存心を産んでしまっては、自立心を削いでしまい、長い眼で見ればアフガン人スタッフのためにもならないので、できる限りこちらも毅然とした態度で必要量まで減らすように交渉するのです。

しかし交渉の際私には始めから軽く見られる要因がいくつもあります。まず弱冠二十歳でＰＭＳ日本人スタッフでも最年少だということです。アフガンでは年長者を敬うので、若いというだけで軽く見られる要因になりえます。またこちらの人は寿命が短い分老化も早く、実年齢が四十歳から五十歳でも日本人の七十歳から八十歳くらいの風貌をしています。そのせいで、ただでも年下なのが余計歳が離れて見えてしまいます。

次に軽く見られる要因は、私はヒゲが薄いということです。こちらの人は大人ならフッサフサのヒゲをタップリ蓄えているのが普通で、極端に言うとヒゲの無いのはまだ子供といった感覚です。このように外見では軽く見られる要因だらけなので、態度だけでもしっかりとしようとこちらが少し厳しい態度で臨むと、アフガン人スタッフも鏡のように厳しい態度で応対してくるのです。そして時には言い争いのようになってしまうこともありますが、こちらの人は少しくらい言い争いしても次の日には何も無かったかのようにあっけらかんとしていて気持ちいいです。

実際に交渉してみるとアフガン人スタッフの最初の注文の半分くらいまで減るのはざらです。ひどいときは全く必要ない注文もあるのでこちらも気が抜けません。

とはいってもできる限り言い争いにはならないように、穏便に、かつ毅然とした態度で交渉できるよう今は努力しています。

「日陰の木」の下で

灌漑用水路建設事担当　梅本霊邦

将来の景観を想像して自分を鼓舞

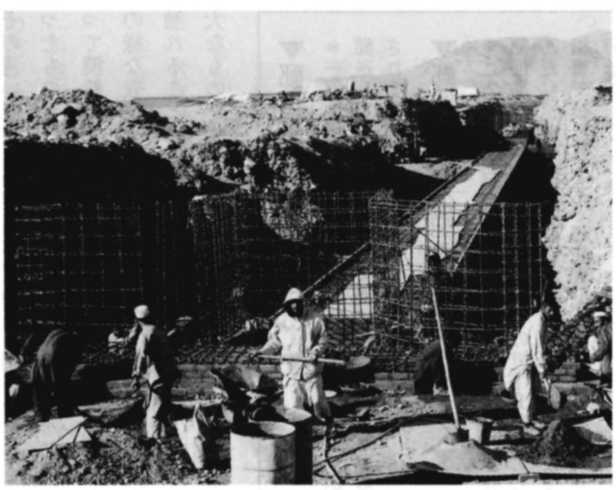
アフガニスタンでの灌漑用水路建設事業に参加して四ヶ月が過ぎた。作業現場であるダラエヌール渓谷下流部周辺はのどかな田園地帯で、用水路沿いの植樹灌水作業を毎日ゆったり楽しくやらせてもらっている。すぐには成果が現れない、強烈な日射しの下での一面単調できつい仕事だが、「いずれはこうなるかな、こんなふうになってほしい」と五、六年後の景観を想像しては自分を鼓舞する。行きずりの村人の「ストレマシ！」（「お疲れさん！」）の掛声や作業現場近隣に住む子ども達が小さな右手を広げ、舌足らずのかわいい口調で投げかける「サラマレークン！」の挨拶にも励まされる。

今のところ、第一期工事で通水した用水路十三キロのうち後半六キロが、この七月に日本に帰国した蓮岡さんから私が引継いだ守備範囲だ。護岸対策と景観づくりを兼ねて柳や桑を用水路沿いに植え育てるのが私の日常業務になる。具体的には作業現場を見回り、揚水ポンプ（吐き出される水勢で盛土がひどく穿掘されるため七月末から使用はやめた）に燃料を補給し作業員に飲料水を配り、用水路まわりの異状の有無を観察点検しながら、用水路沿いに植えた柳の発芽や桑の生育、挿木床の保水状況を見て歩く。活着の見込みのない枝を新しく挿し替え、桑や柳の下枝を払い、繁茂した雑草を取り除くなどの仕事は地元作業員にすべて任せきりにせず、私もいろいろやってみることにしている。日本とは気候や風土、そして文化の違う当地での植樹のノウハウを体得するためだ。

處世界如虚空……。

八月も半ばを過ぎて、この頃は一時のあの灼けつく暑さは幾分やわらいだ感じだ。体が当地の気候に慣れたということもあるかもしれないが、空模様や風の感触からも季節は確実に夏から秋に変化しつつあるように思う。それでも寒暖計は摂氏三〇度から四〇度の間を行ったり来たりする。炎天下、挿木（五〇センチほどの長さの柳の枝）の束とハンマーを入れたバケツを手に提げ、鉄棒（岩を剥ぐための長さ一・二メートル、直径二・五センチの鉄棒を挿木の穴を穿つための道具に転用している）を担いで石ころだらけの凸凹の上をオロオロ歩くのはそれだけでもかなりの「重労働」だ。数百メートルも歩けば胸から背中にかけて汗が噴き出し、ぐっしょり濡れた木綿のシャツが肌にまとわりつく。正直言って、風通しのよい日陰に身を隠してのんびり体を休めたらな……と頻りに思う。

実は、用水路沿いの畑の一角に「日陰の木」と私が秘かに名付けた古木がある。日射しを遮るもののまったくない用水路沿いの作業に倦み、灼けるような暑さに耐えられなくなると、私は畑の片隅にぽつんと佇むこの古木の下に腰を下ろし、近くの井戸で汲んだ冷たい水を飲み干す。通り抜ける風にほっとため息を放ち、クナール川の向こうの山際に浮かぶ雲の象形を暫し楽しみながら一瞬の至福を覚えるのだ。處世界如虚空……。



ブディアライ村を通る用水路K地区のサイフォン工事

日常の中の宗教

PMS病院会計担当　村井光義

カレンダーを焼く

先日、一緒に会計で働く現地スタッフといつもの様に話をしていた。気心知れたスタッフとの時間は、自ずとリラックスし、私は机の横に寄りかかっていた。その机の引き出しの中には彼らが大切にする聖書（コーラン）が納められていた。彼は私に、怒るでもなく、諭すでもなく、只そこに寄りかかるのを止めてくれと言っただけで、その表情はあまりに大らかだった。故意にしたわけではないが、自分の行動を恥ずかしく思った。

随分前のことだが、今年の一月にも彼の言葉から同じような気持ちになった。昨年のカレンダーを処分しようとした時に、彼は古いカレンダーを貰ってもいいかと尋ねた。そこには聖書の一説が引用されていたので、家のどこかに掛けたいのだろうと私は軽く考え、そこで聞いた。彼の答えは全く違う。ここで捨てたら他のゴミと同じように扱われる。それは耐えがたい。自分で燃やして処理するとの事だった。そのときもやはりあの大らかな表情で言うのだ。これと同じカレンダーは病院で幾つかあり、彼は既に何部か集めていた。自分の陳腐な考えを話したことを悔やんだ。キリスト教に限らず、今まで積極的に宗教に接していない私の想像ではとても追いつかない感覚を彼らは持つ。

看護部の詰め所で五歳くらいの少年が夕べの礼拝をしていた。シャルワルカミーズ（現地服）を身につけ、トーペイ（帽子）を被り、ジャイナマーズ（専用マット）の上で、いつも見る髭面の大人たちと同じようにお折りをする。黙々と祈る姿を見ていると、彼から湧き出ている自信のようなものを感じる。体のサイズこそ違うが、彼も立派な一人のイスラム教徒だ。そして、その少年の周りにいる大人が、とても温もりのある表情を浮かべて見守っている。

何か偉大なもの

スタッフが思いっきりはしゃいでクリケットをしていると、たくさんの家族を養っている一家の大黒柱に見えないことがある。また、仕事中に小言を言ったときのスタッフの言い訳が、こちらの耳を疑うような、理由としてあまりに突飛なこともしばしば起こる。普段見せる子ども心を残した彼らからは、敬虔な教徒として見せる表情を想像する事はむずかしい。

ここにある習慣を尊重し、比較するのではなく、その違いを楽しむ。日本であまり関心を持たなかったものとの距離が自然と近づいてくる。私にとって漠然としていた宗教は、生活に溶け込み、あの様な表情や雰囲気を創り出す。日常を透して今触れることのできる彼らの大切なものに、何か偉大なものを感じる。

▼郵送方法の変更について▼

＊一部地域の方々へは発送代行業者を通して別納郵送しております。差出人欄に代行業者名が記載されますのでご了承下さい。

▼郵便払込票の記入は分かりやすく▼

＊ご寄付をお送り下さった郵便払い込み用紙は、郵便局からはコピーが届きますので、文字がにじんだり、かすれて判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

▼寄附をしてくださる皆さまへ▼

＊当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、お願いいたします。

▼未使用の切手、ハガキを！

＊会報の発送等の通信費に、年間数百万円かかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。（使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい）

＊一部地域の方々への会報は「料金別納郵便」でお送りしておりますが、その際も料金の代わりとして未使用切手で支払っております。

アフガン人の幸福の基盤はお金でなく農村社会に

ジャララバード事務所渉外担当　芹沢誠治

懐かしい生活の匂いと活気

文明社会の進歩と世界のグローバル化に嫌気を感じていた私は、いつか封建制度の江戸時代に行ってみたいと、冗談のように考えていた。動機は簡単で、窮屈な洋服や靴を脱ぎ捨て、絣（かすり）か唐桟（とうざん）の和服をきて、カラコロと下駄を鳴らし、今飲んでいる酒よりも遙かに安くて旨い酒が飲めるに違いない、と本気で思っていた。

若い頃は旅好きだったが、ある年齢になってからは、海外旅行など真っ平だ、温泉に浸かって酒食らっている方がずっとマシと思っていた。中村先生の本で「アフガニスタンは日本の戦国時代だ」という文章を読んだとき、信長の時代か、それとも三国志の時代なのか、これは行ってみる価値があるかもしれないと、気になり始めた。

初めてアフガンの地を踏んだ時の印象は、自分がガキだった敗戦直後の復興期の匂いがした。ジャララバードのバザールの通りを、たくさんの車に混ざって、馬車も通れば、牛・羊、ときにはラクダさえ通る。ごった返す物売りの屋台、朝早くから買い物をしている大勢の現地服、ブルーのブルカで顔をかくした物乞い、装甲車で機関銃を構えている米兵。建物の形は違うが、その猥雑さ、汚さ、狭さ、危険さは、戦争直後の新橋・新宿の闇市、上野のアメ横、浅草の繁華街と印象がそっくりで、貧しいけれどふる里を思い出させるような、懐かしい生活の匂いと活気が立ちこめていた。PMSのカナルで働いている現地のレイバーの日当は一二〇ルピー、日本円にすれば二四〇円、なんて安いのだろう。しかし、日本も戦後すぐの復興期に、労働者の日当がニコヨン（二四〇円）といった時代があったのだ。四〇年前、私が沖縄の手前の小さな島、与論島で土方をしていた頃の日当は、一二〇〇円。その中から四〇五円出して焼酎を一本買い、私の恩師というべき唐牛健太郎（六〇年安保当時の全学連委員長）と毎晩コイコイをしながら飲み明かすのが、無上の楽しみだった。

暮らしよい伝統社会

二年半、アフガンに住んでみて、やはり自分はタイム・スリップして、異国ではあるが封建時代にたどりついたという実感がある。欲望という文明の進みすぎた日本にいれば、都会の風景を見ているだけでウンザリ、ゲンナリ、残りの人生は酒を飲んでアル中になるしか手はないと思っていた。アフガンでは好きな酒は飲めない、がその代わりに働いて生きていくことができる。カミさんもその方が身体にいいと賛成するようになった。

確かに、アフガニスタンは、未だ、封建時代であるようだ。封建社会と言ってしまえば、進歩から取り残され、専制君主が支配する「遅れた国」という悪い印象に受け取られがちだ。しかし、視点を変えれば、封建社会はそこに住む人間にとって、現代よりもずっと住み易い平和な社会だったかもしれない。むしろ、マネーと戦争が支配する、現代の資本主義・民主主義社会より、アフガニスタンは遙かに暮らしよい伝統社会だと言える。

アフガニスタンが封建社会であると言えるいくつかの特徴をあげてみよう……。

① 大地に根ざした、自給自足の農村社会であること。電気・ガス・水道施設は不備。

② 「お金がなくても暮らせるが、ヒンズー・クシュの雪がなければ暮らせない」こと。

③ 大家族・家父長制度、部族社会、長老社会、武家（＝軍閥）社会であること。

④ 男女同権社会、人権優先・平等主義、国家主義などではないこと。

⑤ 民主主義教育ではなく、寺子屋式で、真の教育は一族・家庭の中にあること。

⑥ 封建社会を支えているのは、熱い、厚い、イスラム信仰＝宗教社会であること。

「お金がなくても暮らせるが、ヒンズー・クシュの雪がなければ暮らせない」という諺（ことわざ）が、生活の

実感を表していたことを理解すれば、アフガンの人々の生活の基盤と幸福は、欲望の象徴であるお金にではなく、具体としての自給自足の農村社会にあることがよく分るのです。お金のために、他人のために働かされることはなく、大地を相手にして、自分の食い扶持は自分で稼ぐ。そして命のために必要な労働への意欲を支えているのが、イスラムの素朴な信仰と伝統社会なのだ。

一転して大旱魃となれば、水がなくても育つケシを植えるか、土地を捨てて難民とならざるを得ない、だからこそPMSはカナルを造成しているのだが…。そのPMSが造った分水路の土手の道に、小さなジャイナマーズ（お祈りのための莫蓙）を敷いて、夕日が沈む西・聖地メッカに向かって、無心に祈りを捧げているイスラムの人達の姿をみると、なんとも言えない感慨＝灌漑にうたれます。

いつしか一種の家族的気配が漂い

ジャララバード事務所　石橋周一

オフィスは「人の谷」

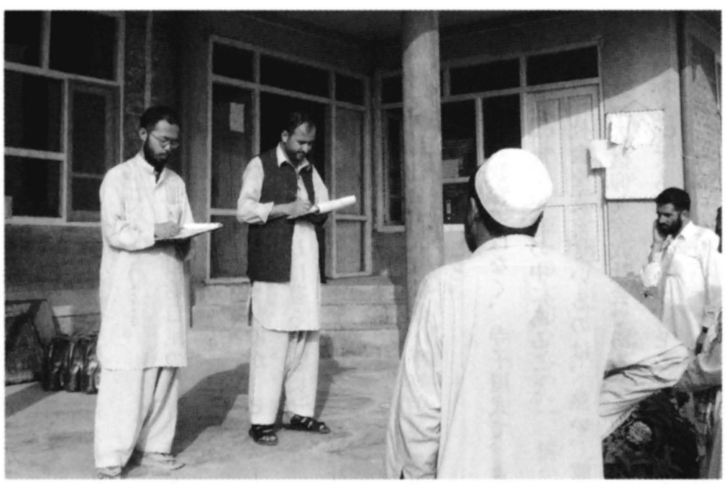
事務担当の役割とは進行下にある用水路、井戸、農業、医療の各事業に必要な物資および車輌の調達を中核としつつ、現場へ持ち込むには無粋過ぎる、ないし面倒過ぎるすべてを引き受けることにあります。

備品が足りない、車が足りない、燃料が足りない、給料も足りない、手当をくれ、休みもくれ、その他諸々の合間を縫って車輌は交通事故に遭い、重機のパーツは盗まれ、日本人スタッフの誘拐計画があるといっては警察や公安が出入りし、わけもわからぬまま対応に追われているうち井戸は増え、カナルはえらい速さで延びているのです。

翻弄の波間に疲れ果てた時、もういい加減うんざりし尽くした時、足腰をやっとのことで踏ん張らせるのは責任の自覚です。炎天下で作業を続ける現場スタッフやレイバーたち、ひいては現地住民に対する責任、そして日本から支えてくださる事務局の方々や会員の皆様（私自身五年間そうでした）に応える責任、現場と日本の遠い遠い距離を繋げる責任にこそオフィスの存在意義があると考えています。

が、いったい責任とは何なのでしょう？　責任に堪えかねて何度も逃げ出したくなり、そのくせ踏みとどまるのもやはり責任のためです。こんなものが存在しなけりゃ世界中誰もが飛び跳ねるように生きていけるでしょうに。そしてあらゆる責任中、おそらく最大たるものは家族を守り養うことであり、現地スタッフたちはそのためにこそ休暇や昇給を求め続け、時に物品の横流しや燃料の着服も厭わず、家族を養うどころか放っぽり出してきた日本人の到底敵うところではありません。とすればこちらにも家族が必要です。ムスリムの娘が異教徒に嫁ぐことを禁じるこの地にあって、さてさてどうしたものか？　改宗するしかないのでしょうか？

資金の出所と同じ国籍を唯一の根拠として上で



朝礼に臨む石橋ワーカー（ジャララバード事務所）

ふんぞり返る日本人と、下から突き上げる現地人とが、しかし毎日抱擁し合い、同じ釜の飯を喰い、同じ屋根の下で眠り、夏には同じ屋根の上で眠り（つまり屋上にベッドを持ち込むのです）、怪我や病気の際にはかばい合いうち、いつしか一種の家族的気配が漂い、日頃いがみ合ってばかりいる点まで含め立派な家族になってしまっている、当座はそんな具合で手近に済ませています。

用水路、農業、医療における現場ことダラエヌールは折り重なる山々による美景を誇り、その地名には「光の谷」という意味があります。一方市中に埋もれるコンクリート打ちっ放しのオフィスは「人の谷」と言えましょう。漢字で「人」に「谷」と書けば「俗」となります。ここは浅薄（せんぱく）かつありふれたあらゆる欲望・思惑の入り交じる俗界であり、もちろん私自身そうした俗物の一人であります。

診療所に来られない人々のためにも何か

ダラエヌール診療所医師　西野恭平

急患はタイムマシンに乗って

「ドン、ドン、ドン、ドン！」という診療所の門を激しく叩く音で目を覚ますと、門の前には家族に背負われた患者が待っている。電気はなく、診療所の中では小さなランプの灯のそばに皆が寄り添って患者を診察する。診療が終わると再び家族の人が患者をおぶって家へ帰っていく。ダラエヌール診療所での夜の急患診療の風景である。

アフガニスタンに来て三ヶ月半が過ぎ、現地の生活にも少しずつ慣れてきたものの、いまだに夜間の急患はタイムマシンに乗ってきたのび太のような感覚で現実感がない。目の前で起こっている事なのに映画の一シーンを見ているように感じる時がある。日本との時差は四時間三〇分だが、実際の生活レベルはどれだけの違いがあるのかと思う。

医療過疎地域にあるダラエヌール診療所には歩いて数時間かけて毎日一〇〇～二〇〇人程度の患者が集まってくる。最初は、数時間歩いてまで来ざるを得ないほど状態が悪いのかと思っていたが、実際に診察してみるとそれ程重篤な感じはなく、どちらかというと元気な印象を受ける患者が結構いる。「熱が一ヶ月続いている」といっても、測ってみると熱は無く苦笑いをしたり、小さな子どもが「体中の関節がずっと痛い」など高齢者のようなことを言ったりと、???な訴えが多く、戸惑うことが多かった。しかも、同じ地域からは同じ人たちがその都度違う症状で来たりする。薬コレクターか？　などと勝手に想像を膨らませていたが、片道数時間、往復半日弱もかけて歩いて集めに来るほど価値のあるものとも思えず、薬など家に飾っても気分が萎（な）えてしまいそうである。しかし、自分自身が体調を崩し、自分の部屋からわずか一分足らずの診療所までさえ薬を取りに行くことが辛かった時に、この人たちの目的が分かったような気がした。診療所まで自分で来ることが出来ないような状態の悪い家族や村の人たちの代わりに薬をもらいに来てるのではないか、と。実際に家に患者がいるかどうかは聞かないので分からないが、そう信じて今はご苦労様という気持ちで薬を処方している。ただ、それは逆に言えば、自分の知らない所にはいまだに医療を受けられない人や地域があるという事を現実の事として認識させられた事にもなった。

命への思いは同じ

幼稚園の時にもらった皆勤賞が自慢だった自分もアフガニスタンに来てからはマラリア、肝炎、寄生虫、蜂窩織炎（ほうかしきえん）と医師ではなく、患者ワーカーとして派遣されたのであれば申し分のない働きをし、病気の辛さを身にしみて感じている。そして、皮肉にも医療を受けられない人がいる事を知る反面、自分自身は医療の有難みを強く感じるようになった。

死が日常の中に入り込んでいるこの国では、日

ダラエヌール診療所の中庭で診療を待つ患者さん

本人の自分とは医療に対する価値観や死に対する受け止め方は違うかもしれない。しかし、下痢が止まらずに亡くなっていく子どもを泣きながら見守っていた母親や、喘息の子どもを一晩中寝ずに看病していた父親に会い、命を大切にしたいと思う気持ちに変わりはないと感じた。今後、ダラエヌール診療所の質を向上させ、診療所に来ることが出来ない人たちに対しても何らかの形で医療を届けられればと思う。さらに時代をさかのぼるタイムマシンに乗ってまだ医療そのものを受けられない地域へ入っていくことが出来たらとも思う。そして、その時にその状況を映画の傍観者やのび太ではなく、現実の問題として受け入れられる自分にならなければと強く感じている。

沖縄のハンセン病療養所で研修

PMS病院薬局　河本定子

PMS病院の日常と同じ時間が

ペシャワールで、ヴィザの更新が難しくなって、突然の日本での待機となりました。

治安が悪くなって、昨年より日常品の買出しに行くことも難しくなっていました。

現地の新聞、テレビでは、たびたびテロの被害の様子が報道されています。しかし、PMS病院の中では、静かないつもと変わらない平和な時間が流れていました。私の住んでいたゲストクォーターのベランダには、クリケットのボールが飛び込んできていました。真っ白な壁面には、ぶどうの青々とした緑の葉が日増しに伸びて、房がおいしそうになっていました。いつものように鳥たちが、食べちゃったのかなあ、と思い出したらもどりたいという気持ちで、胸がいっぱいになります。

日本待機の期間を利用して国立療養所沖縄愛楽園でハンセン病看護の研修のチャンスを頂きました。国立療養所沖縄愛楽園は、沖縄北部（ヤンバル）の屋我地（やがじ）島にあります。島の周りは真っ青に透通る何層もの海に囲まれて、波が太陽の日差しを浴びてキラキラと輝いて見えます。

愛楽園内には、二八四名の入所者の方々が生活の場として暮らしています。園内には、治療棟（外来基本科・入所者及び一般住民の保険治療）・治療センター（急性期病棟四〇床）・一病棟（慢性期病棟五〇床）・一センター（不自由者棟）・二センター・三センター・六センター・居住区（一般者棟）・理学療法室・義肢装具室・自治会館・宗教会館・納骨堂・郵便局　売店・面会宿舎があります。

医療環境は、マルチライス、CT、超音波検査、内視鏡検査、血液透析室、手術室、入院施設、診療科は内科、外科、整形外科、眼科、皮膚科、泌尿器科、耳鼻咽喉科、歯科、循環器科、呼吸器科があります。

ハンセン病の後遺症、合併症を持つ入所者の方々の治療看護は、高齢化と障害者の対応として、リハビリテーション部門が強化されています。理

学療法士を増員、又不自由者棟では、看護師、介護員を配置して、三交代の中でよりよい生活が送れるよう支援されています。

私の研修期間中は、夏祭りや八重山商業高校の慰問沖縄伝統舞踊会・音楽コンサートなどイベントが、盛りだくさんに開催されました。

研修では、主に身体的側面のハンセン病後遺症治療に関する看護技術を学びました。患者さんの治療経過を観察することによって、ハンセン病治療は最初から最後まで予防こそ大切と実感させられました。

沖縄愛楽園療養所では、皆親しみをもって入所者さんと職員の名前をフルネーム又は、名字でなく名前で、○○さんと呼んでいます。同姓の人が多い為だそうです。又言葉は、沖縄の方言で話されます。

何とここは、ペシャワールのPMS病院の私の日常生活とまるで同じだったのです。ハンセン病の後遺症で、車椅子、眼は兎眼(とがん)盲目、手の指切断、足の指変形、手も足も傷予防の為包帯を巻いている高齢者の方に声をかけました。「二週間前に、ここの棟で研修していました。覚えていますか？」「わからんーー」「そうですか。研修終えて帰ります。元気でいてくださいね」「あんたもねーー」。社会的な偏見差別で傷をもった方々が、そのことを胸に潜め日々看護スタッフと入所者さん、患者さんが、お互いの立場で、他者の気持ちを思いやり、大切なものが何なのかを思い起こさせてくれました。

寝たきりの患者さんをベッドから車いすに移乗したとき、声をやっと出して言ってくださった言葉「ありがとう」。思わず私の方こそ「ありがとう」と。

どちらも予約は同封ハガキで！

中村哲医師の最新刊！

10月下旬刊

医者、用水路を拓(ひら)く

——アフガンの大地から世界の虚構に挑む

四六判上製　定価：1800円＋税

戦乱と大旱魃が襲ったアフガン農村の復興のため、全長13キロの第一期工事を完遂し、今また第二期工事に挑む灌漑用水路事業4年の軌跡を詳細に綴ったドキュメント（予約は同封ハガキでお願いします）

2008年カレンダー

「愛と血のアリアナ」

画・甲斐大策

予約受付開始します

A2判（画・7点）定価：1500円（税込）

今年もカレンダーの予約が始まります。テーマは「愛と血」。アレキサンドロスの古代から現代まで、血の代償を払いながら分厚い歴史を重ねてきた文明の十字路・アリアナの愛の風景を描く壮大な叙事詩です。同封のハガキで振るってご予約下さい。

アリアナ大地の心——8

代行

甲斐大策

最近、深く敬愛した九六歳と八十歳の二人の女性が、前後して逝った。

この国では今日、生前は当然として、人が逝った直後から種々の代行業者が登場する。衰退した信心は、煩瑣な葬送儀礼を好まないし、住宅事情もある。軽便、迅速に行事を進めたくて代行者を求めてしまう。悲しみの時間と寂漠の空間は、無感情、没個性の式次第として進行する。

参列者は、聶々と鳴る、陶瓷焼成並みの高熱焼却炉近くから、冷房完備の控室に移される。人々は、数十時間前に起った、整理し切れない事実を胸中に、しばしの時を過すことになる。

七年前、兄弟ハジとの再会に胸躍らせて訪れたペシャワールには、兄弟急逝の報が私を待っていた。その翌日は、イスラムの葬いのけじめである四十日目の墓参当日だった。薄暮の再会への思いは乱れたまゝ、私はコハトの岡に上り、一族の男たちの末端に加わり、兄弟の墓の脇で祈りの時を過した。灼熱の空気と悲しみに身体が揺れたものだった。

アジアの大半の人々は、身近な存在の死を凝視める。送る。祈る。俗世をつくろい祈りを衒(てら)う行為はない。全身全霊での信心が希求し必要とするから行事がある。悲しみは重く、祈りは深い。

二時間近くをへて、導かれた別室で遺族・知人は熱気を保つ骨と対面する。滅多にない程綺麗なのゞ佛でございます、実際は第二頸椎でございますが……、と施設の職員は慇懃に説明しつつ、一刻も早い遺族の退出を願っていた。暦にそって混み合う火葬施設の本音なのである。

私たちは、どれ程のことを自らの身体と心で成しとげているのか、考えていた。心の行方さえも何者かが代行しかねない私たちと、生命は勿論、悲しみも歓びも、正義も、代行を許さないアフガンの兄弟たちを思った。

箸にとった骨は、かさかさと落葉のように軽く薄いのだった。

少女ハキマはアフガニスタンへ戻っていった

――難民の強制帰還とPMS

PMS（ペシャワール会医療サービス）院長代理／看護部長　藤田千代子

少女の手術

お元気でしょうか。

最近は朝夕がやや涼しく感じられるような夏がやっと去ろうとしているのを感じます。こちらに赴任して毎年夏になると、この暑さでは心身ともにもう耐えられないのではないだろうか、と自分自身のことを心配する度に、どこかで雨が降ったのか突然涼しく感じられる風が吹き始めたり、雨は降らないでも曇ってきて日差しが柔らくなったりして一息つけてきたことの不思議さと有難さを感じています。風が少しでも吹き木の枝葉が揺れたり雲が空を覆い始める時、数ヶ月ぶりの雨に草や木がうたれているとき、ここではほっと一息つけます。このような自然の力や日本の皆様の、いろいろな形での現地を思って下さる気持ちに支えられて、この十数年間をこの地で過ごせてきました。

＊　＊

ご存知の方々も多いと思いますが、私達の病院で働くスタッフや、治療を受ける患者はパキスタン人とアフガン人達です。こちらの人が日本人と中国人や韓国人を見分けられないように、私達から見るとパキスタン人とアフガン人は同じにみえます。職員を採用する時もよっぽどの事情がない限り国籍は問わず、毎日二〇〇名近く来院する外来患者にも国籍を問うことはしません。それくらいにここペシャワールは、パキスタン、アフガンの人たちが共存している地です。

今年初め、生まれつき腰に大きな瘤（こぶ）があり、瘤の適除術後排尿障害（垂れ流し）、下肢の感覚障害、歩行困難をもつ一〇歳の女児ハキマが入院してきました。足の変形と共に、左右の脚長差と足が内反し、両足底の外側が地に着くので、体を左右に大きく揺さぶりながらの歩行です。変形している右足の踵（かかと）に数年に及ぶ潰瘍があり、経過の長さを物語るように創（きず）は足底の腱に沿って深く繊維化し足全体が腫脹しています。感覚がなく痛みを感じないため、お母さんが目を離すとひょこひょこと歩いています。

また両方の臀（でんぶ）部に直径七、八センチあるやけど跡のような皮膚状態になっている大きな円形の傷跡があり、小さな開口部からじわじわと浸出液が出ています。よく見るとスカー（瘢痕（はんこん））のしたは大きな円形のポケットになっていました。

初めできものが出来てだんだんこんな状態になったと母親は話していましたが、本当は足の感覚障害を治そうとして、民間療法――大きめの木の葉に香辛料や草などを載せて燃やす。こちらではよくされている療法――を受けてやけどをしたのではないかと思われました。その上、尿の垂れ流しのため自宅ではなかなか治療が思うように行かなかったようです。

創については保存的治療を毎日繰り返していましたが限界があり、水路作業に忙しくしている中村先生に、ペシャワールでまずは両臀部の創の手術をしてもらいました。二、三週間もするとオペ創もなくなり、三年間も臀部からじわじわ出てくる浸出液と排尿障害を持つ子供を見ながら疲れていた母親にとっては、三年も十年の長さに感じられたのでしょうか、彼女の喜びは相当なもので、「十年もよくならなかった傷が一日の手術で良くなった！」と、私も顔や手に彼女の接吻を何回も何回も受けました。

難民強制帰還

臀部の傷の治癒後は足の腱移行術による歩行障害の治療を予定し術前の訓練を始めようとした頃の朝の回診時、アフガン人医師と母親が真剣な表情で家をどうするかなどと話しています。ハキマの家族の話によると、一九七八年からペシャワールのカッチャガレイのアフガン難民キャンプに住

んでいます。アフガン人医師も同じキャンプに住んでいました。パキスタン政府は二〇〇一年一一月にタリバン政権崩壊後現在の新政権が成立した後、これまで何回も延期していたアフガン難民帰還を「自主的帰還」として強行し、カッチャガレイ・キャンプも難民が家を空けた後再び彼らが戻って来れないように、また他のアフガン人が住めないように重機で潰しました。今ではただの広い広い空き地のように見えますが、当時は何かの遺跡ではないかと思うくらいに中途半端に崩れ落ちていました。その時キャンプの両端と一部道路沿いの家の取り壊しはなく、アフガン人達はかなり残っていました。

今年一月、期限付きで国連によるアフガン人難民登録が始まり、院内のアフガン人職員も急いで登録を済ませました。登録証の期限は二〇〇九年一二月三一日までとなっており、病院の職員達はそれまでは安心してパキスタンにいることができると思っていたようですが、そのあとパキスタン政府よりカッチャガレイ・キャンプに住むアフガン人に対して通達が出されました。それはキャンプ地以外の借家に住むか、アフガニスタンへ帰還するか、ペシャワールの北部ディール、チトラール地方に移り住むことのいずれかを選択せよというものです。難民登録をしなかった者は逮捕。借家に移り住むのは期限が設けられ、それを過ぎると家主に対してアフガン人へのレンタルを禁止にするという徹底ぶりです。

期限を過ぎたある夜、職員の一人は家族をこっそり他の地区へ移動させることに成功しました。ある職員は夜間トラックに家財道具を積み込み、先の職員と同じことを試みましたが難民局に見つけられ、そのままトルハム国境へと向かわざるを得ませんでした。更に期限を過ぎて家を移り住んだ人を後日発見したら強制帰還させると発表し、アフガン人が多く住んでいる私達の住居周辺は女性の調査員を加え一軒ずつ調べています。その頃のカッチャガレイ・キャンプを見ると監視員用のテントと重機が物々しく置いてあり、その徹底振りを伺えました。

理不尽な通達

こんな状況の中、これまで問題なく発行されていたペシャワール会のNGO活動許可が、昨年の九月より出なくなりました。活動許可は毎年申請し一年間の許可がもらえます。なかなか出ないので理由を聞いても全く音沙汰無しでした。

やっと今年の五月、ペシャワールのアフガン難民行政監査官から通達があり、以下のことを是正せよというものでした。

①アフガン人医師やナースについて資格が証明されていない、アフガン人医師はパキスタンの医師会に登録もされていない。②PMSが、地元の社会福祉法人と国際NGOとして二重の身分で登録されているのは、問題である。六〇日の期限付きでした。あれから四ヶ月あまりが過ぎ、結果的に分かったのは、どう頑張っても期限内にできることではないということでした。一つを要請通りにしても次にまた新たなことを要請してきて、結局政府はPMS側がギブアップするのを待っているように感じてきました。

多くの問題点を指摘されましたが、それは私達が必要に迫られてやったことでした。――例えば資格を持ったパキスタン人のナースを何人も雇いましたが、彼らは自分の能力を口頭で誇示するばかりで私達の主な仕事の対象であるらい患者に手を触れようともしませんでした。診療したくないと言って泣き出して辞めていった医師もいます。こんなことを繰り返すうち、結局らいの診療をするには自分達でやる気のある現地の人を探してトレーニングを始めたほうが確実でした。パキスタン人、アフガン人の合同でトレーニングをしましたが、アフガン人は二〇〇一年に現カルザイ政権ができるとカーブルへ戻った人が多くトレーニングをしたナースで現在残っているのはパキスタン人が殆どです。

このことが分かると今度はパキスタン人職員に関する資格のことも指摘するようになりました。事情を説明するとさすがに事情を分かってくれる役人もいました。それだからこそ、アフガン人、パキスタン人を問わず診療している私達ペシャワール会へ活動許可を出さないのは、現在政府によって進められているアフガン難民強制帰還の政策と無関係とは思えないのです。

数年前までは、私達が一緒に働いていたレプロシーテクニシャン（らい診療員）が自分の地区にクリニックを堂々と開院し、「ドクターサーブ」と呼ばれ診療活動をしている状態でした。時にはクリニックの隣に自分の薬局を併設している診療員もいて、はじめ私は驚き、何という違法なビジ

ＰＭＳ本院に入院当時のハキマとその母

ネスをやっているのだろうと批判的に見ていました。しかし彼らと共にらい患者の家族診療のため山岳部を回るうちに、村の人々にとっては彼らはなくてはならない存在でたいへん頼りにされていることが分かってきました。政府は医師を公務員として地方に派遣していますが、名簿上に名前があるだけで医師は僻地では勤務していないのでした。こんな北西辺境州の各県の診療が急速に改善されているとはとても思えないのです。

アフガンへ戻ったハキマの家族

中村先生の手術を受けて順調に回復したのを喜び、次は歩行しやすくなるように足の腱移行術を受けようとしている一〇歳のハキマの診察時のことです。これから先どうしようかとアフガン人医師に話していました。借家をしようにも父親は病弱で、ペシャワールでの生活の収入源は長男と次男のくず鉄集めです。良い鉄を拾い集められた時で三千ルピー（約六千円）の収入、難民キャンプに住んでいたので何とか生きてこられたが、アフガニスタン東部のロダット郡にある故郷に戻っても旱魃で作物もできない状態なので、途方にくれている様子です。

ハキマは「お父さんがアフガニスタンに戻るのなら私を置いて行かないで。でも私の足はどうなるの？」と母親に訴え、「ハキマの足を直せるところだったら私はいつもハキマと一緒にいるから」と母親は心細く落ち着きなく返答していました。今さらながら「この人達は本当に本当に安定した行き場所を持たない難民なんだ」と胸の詰まる思いをしました。

今この人達のために何ができるのだろうか。大きな困難が目の前に立ちふさがっているこんな小さな子供達とそれを一生懸命看病し育てているお母さんに今何ができるのだろうかと気持ちばかりがあせり、母親を抱きとめるだけしかできません。

＊　＊

ハキマの家族は一ヶ月半後にアフガニスタンへ戻ってゆきました。ハキマの足は病院でギプスを巻いたまま（今頃はギプスは崩れて外れているはずです）。言いつけを守っているなら、小さな松葉杖をついて歩行しているはずです。いつかアフガニスタンにあるＰＭＳのジャラバードの事務所かダラエヌール・クリニックへ「足の手術がのこっているよ」と言って訪れてくれることを祈っています。

今本当に必要なものは

「Dozen civilians perish in NATO strike」「One ISAF sordier killed」「81 killed in Afghan fighting」「Poisonous kills 30 in Karachi」「16 perish in ...」

これは昨日九月二二日のパキスタンの新聞「フロンティア　ポスト」の新聞の見出しです。

殺害、死亡、爆死、と連日果てしもなく続いています。何のための戦いなのでしょうか。こうもアフガニスタンやパキスタンでの殺し合いが続くと、一体誰のための何のための殺し合いなのだろうかと疑問に思います。北西辺境州自治区の解放や発展の為とも、アフガニスタンに平和をもたらし女性を解放するとも聞きましたが、二〇〇一年一〇月から現在まで、アフガニスタンで外国軍による爆撃がなかった日はないと覚えています。女性が解放されるには、これほどその国の人達が外国人に殺されなければならないのでしょうか。

アフガニスタンを空爆している軍機のその燃料が日本の支援によるものと知り驚きます。自分達に都合の悪い人は殺さなければならないのでしょうか。昔読んだ北風と太陽の話は何かを私達に教えてくれました。今のアフガニスタンのように旱魃の土地に戻って生活を営まなければならない人達に、今必要なものは何かは世界中の誰もが知っているはずです。

●ワーカーOB報告⑤

現在大工修業三年めです

元・灌漑用水路建設担当　鈴木　学

会員の皆様、お元気でしょうか。私は二〇〇三年三月から二〇〇五年三月までの二年間、現地ワーカーとしてマルワリード水路の建設に携わりました。

私は、現地のお百姓さんと毎日朝から晩まで一緒に働いていました。彼らと共にご飯を食べ、共にクナール川の水を飲み、主な仕事であった鉄筋コンクリート構造物の造成に心血を注いでいました。仕事は大変なことの連続でしたが、最終的に自分にとって悲願であったG地区（スランプールの崖）をクナール川の水が越えて来る光景を見ることができました。何もない場所を歩いて測量をした自分にとっては夢のような光景でした。

一緒に働いてくれたお百姓さんは皆、当然畑や田圃の仕事を持っており、農繁期は日本も現地も忙しさは変わりありません。私の実家は農家で小学生の頃から農繁期に親の手伝いをしていたので、その期間の忙しさは良く理解できました。ほぼ毎日残業するのが当然なくらい私のチームは忙しかったため、私は彼らに自分の田畑が忙しいときは無理せず休んでくれと頼んでいましたが、彼らはほとんど休みを取りませんでした。そして、残業が終わるとすぐに畑に直行して真っ暗になるまで働いていたのです。

私は二年間の任期中、現地のお百姓さんと仕事をする中で、自らの持つ価値観をはるかに凌駕するような体験を数多くしました。それらは大切なものとして私の中に存在し続けており、生涯絶対に忘れることはないと思います。私が、自分もこのような人間に近づけるよう努力すべきだと心底感心させられた人物もまた、共に働いてくれた一人のお百姓さんでした。アフガニスタンへ、真実をこの目にしかと焼き付けるんだと、勇んで向かった私の心に最も鮮明に焼き付いたのは、現地のお百姓さんの大きくて温かい手とやさしい笑顔だったのです。

アフガニスタンを経て、原点回帰している自分がいるのが分かりました。お百姓さんは食べ物を作りながら日々命と向き合う。自分は彼らと同じやさしさを持った人間であり続けたいと思いました。そして、具体的な最初のステップとして大工修行を始めました。現在、修行の三年目です。帰国後、知り合いの大工さんのもとで働きながら、夜は職業訓練校でさしがね術や、鑿（のみ）、鉋（かんな）などの砥（と）ぎ方などゼロから学びました。何せ、刃物を砥ぐだけでもちゃんと砥げるようになるには一年以上優にかかる世界です。幸い、木を沢山使った家造りをする親方のもとで修行をすることができ、非常にためになりました。

アフガニスタンでは普通の人達は石を積んで基礎を作り、泥をこねた日干し煉瓦を積んで皆で協力して家を造ります。石や泥が最も身近で手に入る材料だからです。アフガニスタンではずーっと山奥に行かないと大きな木はありませんが、日本では山に木は余って花粉がどうだとか毎年騒いでいます。一方で外国の木を沢山切って持ってきているのも事実です。現地では自分の家を自分で造るのは当たり前のことで、石を積んだりする技術は幼い時から皆、家造りを手伝う時に自然と身に付きます。生活に必要なことは何でも自分たちで工夫してやるというのが百姓本来の姿で、現代日本のように農業と家造りを分けて考える必要はないと自分も考えているのです。

訓練校が終わったのでこの夏から仕事前と帰宅してから、鶏の世話を私が担当しています。中村先生と話をした水車や、合鴨農法などやることはまだまだありそうです。毎年一度は中村先生とお会いする機会を頂いており「暇になったらいつでもこんね」と、仰って頂けるのは大変嬉しいのですが、如何せん私の修行の速度が遅いので「先生、もう少し場数を踏んでから……」「うん、そうやね」といったような会話で、早く行きたい気持ちとは裏腹に、なんとも心苦しい返事をせざるを得ず、大変申し訳なく思っております。

最後になってしまいましたが、状況がますます悪化するなか、中村先生をはじめ、現地で毎日必死に事業を進めている現地ワーカーの皆様、心身の平安を心よりお祈り申し上げております。会員の皆様、これまで同様変わらぬご支援を宜しくお願いいたします。

●事務局便り

＊活動の拠点をパキスタン・ペシャワールからアフガニスタンのジャララバードに移すことになった。こういう日がくるとは、予想だにしないことだった。この一年ほどの間に難民を取り巻く空気が徐々に変わり始めていた。パキスタンからすれば、三〇〇万人の難民が三十年近くも自国に留まるということは、穏やかならざることだというのは想像できる。政府が難民キャンプを、テロや麻薬やもろもろの犯罪の温床と見なしているということも聞いた。それでも難民帰還の強行策を採ることは、これまでなかった。それまで一年から三年のNGOビザが出されていたものが、昨年の春から本国の意向だという理由で突如発給されなくなった（前年秋の大地震に駆けつけた、欧米NGOのイスラムの風習を無視した振る舞いも一因と聞いた）。出ても数カ月、最近では二週間にまで短縮されてきた。難民支援機関であるNGOに対して何者かの強い意志が働きはじめたとしか考えようがない。詳細は中村医師と藤田看護師の報告にあるが、私たちが二十三年間活動したこの地を去るときが来たのである。行き場を失う患者たち、長年勤めてきた現地スタッフや日本人ワーカーの思い。私たちのこれまでの活動の全てが問われることになる。

＊拠点を移すアフガニスタンの情勢は、日々悪化している。長い戦乱と旱魃によって疲弊した大地に、米軍による連日の空爆が続く。二〇〇一年十月七日に始まった報復爆撃から六年になろうとしている。米軍もNATO軍もISAF（国際治安支援部隊）もすでに敵を見失い、自らの影と闘いつつ誤爆によって無辜の民を殺し続けている。「対テロ戦争」という妖怪が何を生み出したのか、給油活動で参戦する私たち日本人も、アフガンの難民や農民の視点で考える時である。

ペ村から――――――――――――♬

中村医師とご縁があって、入会して二十三年になります。最初は会費が集まらないのに次々と事業を発展させられるので、そんな無茶なと思いながら今日までついて来ましたが、この頃は中村医師の虜になりました。少し前から事務局のお手伝いをしています。色々な経歴の方が見え、得意分野を生かして手と口を動かし、時には口が動き過ぎて、電話が聞こえないとお叱りを受けることもある程、色んな話が飛び交う楽しい事務局です。私はボランティアと言うのは一・目的が同じ、二・楽しいこと、三・仕事に責任を持つことが大切だと日頃思っています。又、日中事務局に来られなくて顔をあわせないけれども、会計担当の方、翻訳担当の方など多くの方々に支えられて事務局の今日があると思っています。最近柳と桑の木が青々と繁った用水路の写真を見て感動しました。お陰で生きがいのある楽しい老後が送れる事に感謝しています。（A）

医者、用水路を拓く　中村哲【近刊】1890円
―アフガンの大地から世界の虚構に挑む―
アフガニスタン東部での灌漑用水路建設の4年を綴った激動の記録

丸腰のボランティア　中村哲編　【重版】1890円
―すべて現場から学んだ―

空爆と「復興」【2刷】1890円

辺境で診る　辺境から見る　【3刷】1890円

ダラエ・ヌールへの道　【3刷】2100円

医者 井戸を掘る　【10刷】1890円

医は国境を越えて　【6刷】2100円

ペシャワールにて　【8刷】1890円

聖愚者の物語　甲斐大策　1890円

石風社　福岡市中央区渡辺通2-3-24　TEL 092(714)4838

アフガニスタンの診療所から　609円

筑摩書房　東京都台東区蔵前2-6-4　TEL 03(5687)2670

価格はすべて税込価格（税5%）です

会則

①本会の名称をペシャワール会とする。

②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行なうことを目的とする。

③本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。

④会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。

⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。

⑥本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。

⑦本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。

⑧毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。

⑨本会の事務局をFARAHOUSE（〒八一〇―〇〇四一福岡市中央区大名一丁目一〇―二五　上村第二ビル六〇三号　TEL七三一―二三七二）内におく。

発行所●ペシャワール会　〒810-0041　福岡市中央区大名1丁目10-25　上村第2ビル603
☎（092）731（2372）FAX　092（731）2373　郵便振替　01790-7-6559
発行日　2007年10月3日　No.93　会長 後藤哲也　現地代表 中村哲　名誉会長　高松勇雄